

属格名詞の構造位置について

On the Structural Positions of Genitive Nouns

福田 稔

生成文法の統語研究では名詞句をDの投射とするDP分析が一般的であるが、最近では名詞句内部に節構造に対応する左周辺部構造があるというAboh et al. (2010)の提案がある。この提案を前提とし、本稿ではDPの左位置に生じる属格名詞のうち主格属格、所有属格、時間名詞属格の構造位置の相違について次の3つの提案を行う。第一に、主格属格はDPの指定部にあり、属格'sは統語的な投射を形成しないこと。第二に、所有属格はDPより上位の位置に生じ、属格'sは統語的な投射を形成していること。第三に、時間名詞属格はDPの付加詞であり、属格'sは統語的な投射を形成していること。これによって、3種類の属格名詞の統語的な相違だけでなく、過去の分析の問題が克服できると論じる。

キーワード：属格名詞、主格属格、所有属格、時間名詞属格、左周辺部、名詞句、DP

目次

- I はじめに
- II 英語の属格名詞
- III 属格名詞の語順と構造
- IV 問題
- V 統語位置の相違
- VI おわりに

I はじめに¹

生成文法の統語研究では名詞句をDの投射とするDP分析が一般的であるが、最近では節構造と名詞句構造の平行性に着目し、名詞句内部に節構造に対応する左周辺部構造（Rizzi (1997)）があるという仮説をAboh et al. (2010) は提案している。

この仮説を前提とし、本稿ではDPの左位置に生じる属格名詞のうち主格属格、所有属格、時間名

詞属格の構造位置の相違について次の3つの提案を行う²。第一に、主格属格はDPの指定部にあり、属格'sは統語的な投射を形成しないこと。第二に、所有属格はDPより上位の位置に生起し、属格'sは統語的な投射を形成していること。第三に、時間名詞属格はDPの付加詞であり、属格'sは統語的な投射を形成していること。これによって、3種類の属格名詞の統語的な相違だけでなく、過去の分析の問題が克服できると論じる。

第2節では、英語の属格名詞の種類を概観し、第3節で、天野(2006)のアンケート調査による英語の属格名詞の語順と構造の分析を紹介する。第4節では、天野(2006)の主格属格、所有属格、時間名詞属格と場所名詞属格に関する構造分析の問題点を指摘する。第5節では、Takano(1990)の分析を紹介し、その問題点と代案を提示する。最後の第6節で議論をまとめる。

II 英語の属格名詞

Quirk et al. (1985: 321-322) は、主に意味を根拠にして8種類の属格に分類した³。以下にそれぞれを例示した⁴。

- (1) 所有属格 (possessive genitive)⁵
 - a. *Mrs Johnson's* passport (Mrs Johnson has a passport.)
 - b. *the earth's* gravity (The earth has (a certain) gravity.)
(Cf. the gravity *of the earth*)
- (2) 主格属格 (subjective genitive)
 - a. *the boy's* application (The boy applied for ...)
 - b. *her parents'* consent (Her parents consented.)
(Cf. the decline *of trade* (Trade declined.))
- (3) 目的格属格 (objective genitive)
 - a. *the family's* support ((...) supports the family.)
 - b. *the boy's* release ((...) released the boy.)
(Cf. a statement *of the fact* ((...) stated the fact.)
- (4) 起源の属格 (genitive of origin)
 - a. *the girl's* story (The girl told a story.)
 - b. *the general's* letter (The general wrote a letter.)
 - c. France's wines (France produces wines.)
(Cf. the wines *of France*)
- (5) 記述属格 (descriptive genitive)
 - a. a *women's* college (a college for women)

- b. a *summer's* day (a summer day / a day in the summer)
 - c. a *doctor's* degree (a doctoral degree / a doctorate)
(Cf. the degree *of doctor*)
- (6) 度量属格 (genitive of measure)
 - ten days'* absence (The absence lasted ten days.)
(Cf. an absence *of ten days*)
 - (7) 帰属属格 (genitive of attribute)
 - a. *the victim's* courage (The victim had courage. / The victim was courageous.)
 - b. *the party's* policy (The earth has a (certain) policy.)
(Cf. the policy *of the party*)
 - (8) 部分属格 (partitive genitive)
 - a. *the baby's* eyes (The baby has (blue) eyes.)
 - b. *the earth's* surface (The earth has a (rough) surface.)
(Cf. the surface *of the earth*)

本稿では、天野(2006: 2)とDeclerck(1991: 253)に従い、上述の8種類の属格に加えて、次の2種類を認めることにする。

- (9) 時間名詞属格 (genitivized temporal nouns)
 - today's* event
- (10) 場所名詞属格 (genitivized place names)
 - a. *Liverpool's* history
 - b. Asia's future

次節では、(1)から(10)に示した10種類の属格がどのような語順で生じるかという天野(2006)の考察と構造分析を概観する⁶。

III 属格名詞の語順と構造

1 天野(2006)の分析

天野(2006: 1)は、前節で考察した10種類の属格名詞に関するアメリカ、カナダ、オーストラリアにおけるアンケート調査を基にして次の2つの主張をしている。

- (11) 現代英語にはDP分析と複合語分析のどちらにも合致しない属格表現があり、さらに別

の構造を少なくとも2つ仮定する必要がある。

- (12) 属格名詞が現れる構造的な位置が現代英語に最低4つあるとすると、主要部名詞 (head noun) の広い意味での修飾語 (modifier) が現れる位置とほぼ対応することになり、ここで提案する構造分析の妥当性が裏付けられる。

それぞれの属格名詞が生じる属格表現の構造を天野 (2006) は次のように分析している。(12) で触れたように4種類の構造位置がある。

- (13) 所有属格、主格属格、目的格属格、起源の属格、帰属属格、部分属格
 a. John's book
 b. [DP John [D' [D 's] [NP book]]]
- (14) 記述属格
 a. a woman's college
 b. a [N [N' woman's] [N college]]
- (15) 時間名詞属格、場所名詞属格
 a. i. tomorrow's three surprising meetings
 ii. [DP [D' [D [D] tomorrow's] [NP three [NP [N' surprising [N' [N meetings]]]]]]]
 b. i. China's many powerful leaders
 ii. [DP [D' [D [D] China's] [NP many [NP [N' powerful [N' [N leaders]]]]]]]
- (16) 度量属格
 a. i. a tedious ten miles' walk
 ii. [DP [D' [D a] [NP [N' tedious [N' ten miles' [N' [N walk]]]]]]]
 b. i. a long 12 hours' journey
 ii. [DP [D' [D a] [NP [N' long [N' 12 hours' [N' [N journey]]]]]]]

2 所有属格の構造

それぞれの構造分析の根拠を概観してみよう。(13b) では主要部Dを'sが占めており、Abney (1987: 79)のDP分析に合致する構造である。したがって、主要部Dには定冠詞theが生起できないので、属格と定冠詞が共起しないという事実が説明される。

- (17) a. *the John's book
 b. *John's the book

ここで注意すべきことは、主格属格 (2)、目的格属格 (3)、起源の属格 (4)、帰属属格 (7)、部

分属格 (8) の事例では、DPの指定部を定名詞句が占めており、(17a)とは異なるということである。例えば、主格属格 (2a) は (18) の構造を持つ。

- (18) [DP the boy [D' [D 's] [NP application]]] (Cf. (13b))

次に (14) の記述属格の構造分析であるが、冠詞との共起という点において (13) とは異なり、(19) に示すように冠詞との共起は許される。この事実は、例えば、(19b) は (20a) ではなく、(20b) のような構造を成していることを示唆している。

- (19) a. a women's college (= (14a))
 b. the women's college
 (20) a. [DP the women [D' [D 's] [NP college]]]
 b. [DP [D' [D the] [NP women's college]]]

天野 (2006: 2) はTaylor (1996: 290) の考察を基に、記述属格は形容詞などの修飾語の介在を許さないことを指摘している。(14b) に示されているように、記述属格はNという単語の一部になっているからである。

- (21) a. [the woman]'s torn magazine (所有属格の解釈のみ)
 b. the torn [woman's magazine] (記述属格の解釈を維持)

この天野 (2006) の指摘に関して、COCA (Corpus of Contemporary American English) で調査してみたところ、固有名詞を除けば、women's collegeを形容詞が修飾する事例のほぼ全てが、(22) のように何も介在しない事例であった。介在していると思われる唯一の事例women's medical collegeは「女子医大」という単語を成していると考えられる。

- (22) the *first* women's college (2), the *famous* women's college (1), the *adjoining* women's college (1), the *1978* women's college (1), the *well-known* women's college (1), the *Washington-based* women's college (1), the *small* women's college (1), the *only* women's college (1), the *NCAA* women's college (1), the *local* women's college (1), the *largest* women's college (1)

天野 (2006: 3) は、同様の形容詞を属格名詞と主要部名詞に介在させるテストを、時間名詞属格、場所名詞属格、度量属格、イディオム表現に対して行い、以下のような結果を導いている⁸。

- (23) 時間名詞属格は容認性が高い
 a. today's *torn* newspaper
 b. yesterday's *surprising* meeting
- (24) 場所名詞属格は容認性が高い
 a. Britain's *wet* weather
 b. this country's *cold* weather
- (25) イディオム表現は容認性が低い
 a. for God's *good* sake
 b. out of harm's *long* way

これから導かれることは、時間名詞属格と場所名詞属格においては属格名詞と主要部名詞の結束力は弱く、介在している形容詞は主要部名詞を修飾する付加詞として機能していること、また、イディオム表現では属格名詞と主要部名詞の結束力は強いために介在を許さず、単語のような固定した構造を形成している可能性である。

3 時間名詞属格と場所名詞属格の構造

次に、(15) の時間名詞属格と場所名詞属格の構造分析を検証してみよう。天野 (2006: 3-4) が示すように、これは属格限定詞 (= 属格代名詞) や冠詞との共起、時間名詞属格と場所名詞属格との共起が容認されにくいという事実に基づいている (イタリック体は筆者による)。

- (26) 時間名詞属格yesterday'sと属格限定詞their
 a. *their* yesterday's job
 b. yesterday's *their* job
- (27) 時間名詞属格today'sと属格限定詞your
 a. *your* today's companion animals
 b. today's *your* companion animals
- (28) 時間名詞属格this year'sと場所名詞属格Britain's
 a. *this year's* Britain's wet weather
 b. Britain's *this year's* wet weather
- (29) 時間名詞属格last year'sと場所名詞属格this country's
 a. *last year's* this country's cold weather
 b. this country's *last year's* cold weather

(15) の構造の特徴は、DPの主要部に空のDと語彙的に具現化しているDの2つがあるというこ

とである⁹。その根拠は3つある。まず、(30) に示したアンケート結果からわかるように (天野 (2006: 3-4))、(26 a) と (27 a) の方が (26 b) と (27 b) より容認する母語話者が多いという事実である。これから、属格限定詞が占める統語位置を仮定してもよいように思われる。次に、(28) と (29) の容認性は低いものの、時間名詞属格と場所名詞属格の語順に関しては揺れがある。これはこれらの属格が純粹な限定詞でないことが起因していると天野 (2006: 4) は示唆している。

(30)

番号	順序	ok	?	*	total
(26a)	their – yesterday's	16/15.8%	20/19.8%	65/64.4%	101/100%
(26b)	yesterday's – their	6/5.9%	11/10.9%	84/83.2%	101/100%
(27a)	your – today's	17/16.8%	25/24.8%	59/58.4%	101/100%
(27b)	today's – your	5/5.0%	13/12.9%	83/82.2%	101/100%
(28a)	this year's – Britain's	17/16.8%	14/13.9%	70/69.3%	101/100%
(28b)	Britain's – this year's	6/5.9%	16/15.8%	79/78.2%	101/100%
(29a)	last year's – this country's	2/2.9%	11/16.2%	55/80.9%	68/100%
(29b)	this country's – last year's	7/10.3%	20/29.4%	41/60.3%	68/100%

また、時間名詞属格と場所名詞属格は通常は他の修飾語に先行し、後位限定詞 (postdeterminer) と呼ばれる語句の前に生じる¹⁰。

- (31) a. tomorrow's *three* surprising meetings
 b. China's *many* powerful leaders

上記の事実から天野 (2006) は以下のように考察し結論付けている。(i) 時間名詞属格と場所名詞属格はDPの左端の位置、つまり、主要部に位置していること、(ii) DP内部に属格限定詞と時間名詞属格・場所名詞属格が占める位置があること、(iii) 属格限定詞は純粹の限定詞であるが、時間名詞属格と場所名詞属格は純粹の限定詞でないこと、が示唆される。これらを表す構造として (15) では、純粹の限定詞である属格限定詞のための位置をDP主要部に空のDを仮定し、それに時間名詞属格・場所名詞属格が付加していることで、これらは限定詞であるものの純粹の限定詞でないことを表している。また、(23) と (24) で考察したように、(15) は他の修飾語の介在を許す構造にもなっている。

4 度量属格の構造

(16) の度量属格の構造分析には2つの根拠がある。度量属格と他の修飾語句との語順の自由度と、冠詞や限定詞との共起が許される事実である。天野 (2006: 5) の調査によると、(32) から (36) の事例に対して約85%から約60%の母語話者がokか? の判断をしている¹¹。

- (32) a. the minute's *traditional* silence
 b. the *traditional* minute's silence
- (33) a. 12 hours' *long* journey
 b. a *long* 12 hours' journey
- (34) a. a mile's *tedious* walk
 b. a *tedious* ten miles' walk
- (35) a. *her* ten minutes' sound sleep
 b. during *the* ten minutes' sleep
 c. *a* ten minutes' sound sleep
- (36) a. *his* ten years' supply of whisky
 b. *a* ten years' supply of whisky

したがって、(16) に示したように、冠詞や限定詞はDPの主要部位置を占め、度量属格はN'への付加詞となる。

5 他の修飾語との対応関係

Quirk et al. (1985: 253-264) は、主要部となっている名詞を修飾する表現には、前位限定詞 (predeterminer)、中核限定詞 (central determiner)、後位限定詞 (postdeterminer)、形容詞修飾語 (adjectival modifier)、複合語第1要素 (first noun of compound) の5種類があると分析している¹²。天野 (2006: 7) は、これらの表現と、(13) から (16) に示した属格名詞の位置に対応関係があると論じ、その対応は次のようにまとめることができる。

	修飾語の種類	対応する属格名詞	
1	前位限定詞		(his 属格)
2	中核限定詞	(13)	所有属格、主格属格、目的格属格、起源の属格、帰属属格、部分属格
3	後位限定詞	(15)	時間名詞属格、場所名詞属格
4	形容詞修飾語	(16)	度量属格
5	複合語第1要素	(14)	記述属格、イディオム属格、価値や量の度量属格

主要部名詞と構造的な関係が最も強いのは複合語第1要素であり、これは単語の一部となっているので、他の要素の介在を許さない。(37) の5から上に行くにしたがって構造的な関係が弱くなり、1の前位限定詞が最も弱い。階層構造という観点から考えれば、1の前位限定詞が最も上位の位置を占め、5の複合語第1要素が最も下位にあることになる。

IV 問題

1 所有属格と主格属格

天野 (2006) は、属格名詞が現れる構造的な位置が現代英語に最低4つあると提案しているが、以下では2つの問題があることを指摘する。まず、(19) に示された、所有属格、主格属格、目的格属格、起源の属格、記述属格、部分属格の構造であるが、これら6種類の属格を一様に同じ構造として扱うのは以下のような経験的な問題がある。例えば、Takano (1990) は次のような事例を指摘して、(少なくとも) 所有属格と主格属格には構造的な相違があると論じている。

- (38) PRO解釈 (Roeper (1983), Takano (1990))
 a. *John's* speeches *PRO* to win the election
 b. * *John's* cat *PRO* to anger his aunt
- (39) 代名詞同一指示 (Takano (1990))
 a. * *John's* examination of *him*
 b. *John's* book about *him*
- (40) 条件C効果 (Lasnik (1989), Takano (1990))
John's picture of *John*

(38 a) は「選挙に勝つためにジョンが行った演説」、(39 a) は「ジョンが彼を診察したこと」という解釈になるので主格属格の事例であるが、後者は容認されない。(38 b) は「叔母を怒らせるためのジョンが飼っている猫」、(39 b) は「ジョンが持っている彼についての本」という解釈であるので所有属格の事例である。しかし、前者は容認されない。ただし、(39 b) には別の解釈も可能である。それを示したのが (40) である。(40) は「ジョンが持っているジョンの絵」という解釈の時は容認されるが、「ジョンが描いたジョンの絵」という解釈の時は容認されない。

これらの事例で考察されるPRO解釈、代名詞同一指示、条件C効果における文法性の差は構造の違いによって説明されるのが一般である。しかし、天野 (2006) が提案した (13) の構造ではこれらの差異を捉えることができない。第5節でTakano (1990) の提案も検討し、代案を提示する。

2 時間名詞属格と場所名詞属格

ここでは、(15) に示された時間名詞属格と場所名詞属格の構造分析に3つの問題があることを指摘する。具体的には、DPの主要部に空のDがあり、時間名詞属格・場所名詞属格が語彙的に具現化して右側に付加しているという分析は以下の問題に直面する。

第一に、空のDに語彙的Dが付加している複合構造は言語一般に見受けられる構造であるかという問題である。この事例に限って仮定される構造であるとするならばアドホックな仮説となる。

次に、言語獲得の問題が生じる。空のDに語彙的Dが付加している複合構造を子どもはどのようにして獲得するのだろうか。COCAとGoogle Scholarで検索したところ、属格限定詞に時間名詞属格・場所名詞属格が続いて生起している事例はほとんど存在しない。最初の問題で指摘したように、言語一般に存在する構造でないとすれば、英語という特定言語のデータを基にして子どもは(15)の構造を仮定しなければならない。利用できるデータが無い環境で、どのようにして空のDに語彙的Dが付加している複合構造が獲得されるのか不明である。

第三に、既に触れたように、コーパスには属格限定詞に時間名詞属格・場所名詞属格が続いて生起している事例はほとんどない。しかし、(15)の構造は、そのような事例が存在することを予測する。

最後の点に関しては、(30) に示したアンケート結果の解釈に問題があったと考えられる。本来着目すべき事実は、(26 a) と (27 a) の方が (26 b) と (27 b) より容認する母語話者が多いという事実ではなく、(26) と (27) は一般に容認されないという事実である。(37) の表からわかるように、もともと属格限定詞はDPの最上位の位置を占める要素であるので、それに時間名詞属格・場所名詞属格が先行する (26 b) と (27 b) は、(26 a) と (27 a) と比較すれば容認性は低くなるのは自然である。母語話者が最小対 (minimal pair) を成す資料を提示されて、容認性や文法性を判断するときは、絶対的な尺度に照らし合わせて判断するというより、比較してどちらがより容認性や文法性が高いか (あるいは低いか) ということを判断するという可能性があることを念頭に

おいて分析すべきであろう。

同様の考えに基づけば、(30) に示された、(28) と (29) の事実も説明できると思われる。つまり、属格限定詞を伴った時間名詞属格・場所名詞属格は、属格限定詞が単独で用いられた場合と同じように、最上位の位置を占める要素であると判断される。よって、その要素が左端に来ている (28 a) と (29 b) は、その語順になっていない (28 b) と (29 a) よりも容認性が高くなるのである。

天野 (2006) が提示した (15) は受け入れられない分析であるが、本稿では時間名詞属格・場所名詞属格の構造分析の代案として、次の付加構造を提案する。時間名詞属格についてより詳細な構造は第5節で提示する。

- (41) a. tomorrow's three surprising meetings
b. $[_{DP} [_{DP} \text{tomorrow's}] [_{DP} D] [_{NP} \text{three} [_{NP} [_{N'} \text{surprising} [_{N'} [_{N} \text{meetings}]]]]]]]]]$

V 統語位置の相違

1 Takano (1990) の分析

Takano (1990) はDP内部にINFLの投射があると仮定して、(38) から (40) に挙げた所有属格と主格属格の相違を以下のように分析している。

- (42) 主格属格
a. *John's* speeches
b. $[_{DP} [_{IP} [_{DP} \text{John}] I] [_{NP} \text{speeches}]]]$
- (43) 所有属格
a. *John's* cat
b. $[_{DP} [_{IP} [_{PP} e [_{DP} \text{John}]]] [_{IP} t I] [_{NP} \text{cat}]]]$

派生名詞 (examination, speechなど) や絵画名詞 (book, pictureなど) には節に対応する解釈が可能であるが、本来的な名詞 (catなど) は項構造を欠き、そのような解釈は得られない (有村・その他 (2009: 10))。 (42) のように、主格属格の場合はDP内部のIP指定部に置くことで主語の解釈が得られる事実を説明している。所有属格の場合は、DP内部のIP指定部に、空の前置詞が主要部であるPPが生成され、後に話題化 (topicalization) を受けてIP付加するとTakano (1990) は提案している。この仮説の利点として、Takano (1990) は (44 a) と (44 b) の文法性の差を挙げている。彼はChomsky (1986) の障壁理論を仮定して、(44 a) は1つの強い障壁と1つの弱い障壁を越えているが、(44 b) では2つの強い障壁を越えていると論じている。

第二の仮説は属格'sの構造的な位置づけである。(50)の属格'sは名詞armyやboyに付加しているのではなく、the Roman armyやthe little boy全体に付加している。

- (50) a. *the Roman army's* invasion of the city (主格属格)
b. *the little boy's* bicycle (所有属格)

しかしながら、この事実を根拠に(50)の構造を(51)でなく(52)であると結論付けることはできない。というのも、(51)の指定部に位置している属格名詞が(53)の構造を成しており、属格'sがthe Roman armyやthe little boy全体に付加している可能性があるからである。

- (51) a. [_{DP} [the Roman army's] [_{D'} [_D] [invasion of the city]]]
b. [_{KP} [the little boy's] [_{K'} [_K] [bicycle]]]
(52) a. [_{DP} [the Roman army] [_{D'} [_D s] [invasion of the city]]]
b. [_{KP} [the little boy] [_{K'} [_K s] [bicycle]]]
(53) a. [_{DP} [[the Roman army][s]] [_{D'} D [invasion of the city]]]
b. [_{KP} [[the little boy][s]] [_{K'} K [bicycle]]]

本稿では、主格属格は(52 a)の構造を成し、所有属格は(53 b)の構造を成していると仮定する。この仮説によると、(52 a)の指定部にあるthe Roman armyはその右のD'とD'が支配する要素をC統御する。これに対して、(53 b)の指定部にあるthe little boyは属格の投射内にあるために、その左のK'とK'が支配する要素をC統御しない。(38)から(40)の事実はこのように説明される¹⁶。

3 時間名詞属格

まず、Takano (1990) が検討した(45 a)を再検討してみよう。

- (54) yesterday's lecture (= (45 a))

この事例には「昨日のために予定されていた講演」という解釈だけでなく、「昨日誰かが行った講演」という解釈もあることを指摘した。後者の解釈はTakano (1990) の(45 b)の構造分析で捉えることはできないが、本稿の提案では次のように説明される。

まず、派生名詞lectureは項構造を持つので、講演を行う人に対応する項が生じるが、時間名詞属格yesterday'sは項ではないので、(47 c)のDPに付加した付加詞であると考えられる。よって、(45 a)は(41 b)をKPに組み込んだ構造になり、次のように分析される。

- (55) [_{KP} [_{DP} [[yesterday][s]] [_{DP} PRO [_{D'} D [_{NP} lecture]]]]] (cf, (41 b))

Takano (1990) の分析と異なり、yesterdayはDP指定部に生じたのではないため、DP指定部にPROが生じることが可能となり、「昨日誰かが行った講演」という解釈が得られることになる。この場合、yesterdayはlectureが意味するイベントの時を表しているが、例えば、イベントの解釈を欠く本来的な名詞deskとは相容れない。

- (56) *yesterday's desk

VI おわりに

本稿では、英語の10種類の属格名詞に関する天野(2006)の構造分析を概観し、その中の3つ、つまり、主格属格、所有属格、時間名詞属格(と場所名詞属格)の構造位置の相違について再検討を行った。具体的には、名詞句の構造に節構造に対応する左周辺部構造があるというAboh et al. (2010)の仮説を採用して、(57)にまとめた提案を行った。

(57)	構造位置	属格'sの投射
主格属格	DP 指定部	投射しない
所有属格	KP の Topic 指定部	投射する
時間名詞属格	DP に付加	投射する

属格名詞の包括的な構造分析が必要なことは言うまでもないが、本稿の第5節の議論から生じる3つの問題を指摘し、今後の検討課題としたい。まず、(44)に例示した移動規則と属格名詞の構造位置の関係である。現在のミニマリスト・プログラムではChomsky(1986)の障壁理論をどう取り組むか明確でなく、(44 a)と(44 b)の文法性の差異がどのように説明されるのか課題として残ることになる。

次に、(53)や(55)のDP主要部には音形を持った要素が無いが、この仮説のもとで所有属格や時間名詞属格が定表現(definite expression)であるという事実はどのように説明されるのかという課題が残ることになる¹⁷。

最後に、(41)や(55)の構造分析によって、時間名詞属格と主要部名詞との間に修飾語が介在できるという事実は説明できるものの、(26)と(27)で示した、時間名詞属格と属格限定詞は一般に共起しないという事実はどのように説明されるかという点も課題となる。

注

¹ 本研究は平成23年度科学研究費補助金(基盤研究(C)課題番号:22520506 研究課題名 左周辺部構造と主語の特異性に関する統語研究 代表者 福田稔)の援助を受けている。また、本稿の第5節は、福田(2011)の第1節から第3節に基づいている。

² 表記を簡潔にするために、例えば、主格属格というとき、属格の形態'sを指し示す場合とそれが付加した属格名詞の表現を指し示す場合がある。

³ Quirk et al. (1985) の分析の問題点については、高橋(1998:110)を参照のこと。

⁴ 属格の種類日本語名称は天野(2006)に従った。

⁵ 学校英文法では専ら「所有格」という名称が使われているが、これらの事例からわかるように、所有は属格の1つの意味・用法に過ぎない。

⁶ Huddleston and Pullum (2002:467-470)は主に構文上の属格名詞の生起位置に着目して、属格構造にはType IからType VIまでの6種類あると論じている。その中のType I: subject-determinerとType VI: attributive genitiveが本稿での分析対象となる。

⁷ カッコ内の数字は出現数を表す。また、イタリック体は筆者による。興味深いことに、副詞が用いられたthe *predominantly* women's college(大部分が女性の大学)という事例もある。

⁸ 具体的な数値については天野(2006)を参照されたい。

⁹ この分析の問題点は次節で論じる。

¹⁰ 後位限定詞の具体例は注12を参照されたい。

¹¹ ただし、enoughを用いた、a dollar's *enough* worth of beerやten years' *enough* supply of whiskyといった表現は容認性が低く、約8割の母語話者が*という回答をしていると天野(2006:3)は報告している。この価値や量の度量属格の例を説明するために天野(2006)は、表(37)の最下段に示したように、価値や量の度量属格は記述属格やイディオム属格と同じように単語を形成しており、修飾語の介在を許さないと仮定している。

¹² 具体例は次の通りである。

(i) 前位限定詞: all, both, half; double, twice, three-times, etc.; one-thirds, one-fifth, etc.; such, what

(ii) 中核限定詞: a, the, this, that, every, each, some, any, either, no

(iii) 後位限定詞: 基数詞、序数詞、many, (a) few, several, much, (a) little, a lot/plenty/number of

(iv) 形容詞修飾語: 多数の形容詞

(v) 複合語第1要素: 多数の名詞

¹³ Fukuda(1993)ではKを日本語の格助詞が生起する文法範疇と仮定したが、ここでは節構造のC(omplementizer)の投射に対応する文法範疇として仮定した。概ね(48)に対応する要素の階層

構造から成ると考える。

¹⁴ 同様の考察を加藤(1999)も行っている。話題は既知情報であることが前提となることに注意されたい。また、Kuno(1987)はエンパシー(empathy)の研究で、話者は名詞句の主要部より属格名詞の方に視点を置く傾向があることを指摘していることも注目に値する。

¹⁵ Lambrecht(1994:131)は次のように話題を定義している。この定義は節構造における話題であるが、これより小さい名詞句のレベルであっても、指示物に関する情報を表している点、それに、指示物に対する聞き手の知識を増すという点で、所有属格名詞は話題になり得る要素であると言えるだろう。

(i) A referent is interpreted as the topic of a proposition if in a given situation the proposition is considered as being about this referent, i.e. as expressing information which is relevant to and which increases the addressee's knowledge of this referent.

¹⁶ (44)に示した移動規則との関係について、福田(2011)では、Stroik(2009)が提唱するサバイバル・ミニマリズムを前提とし、純粋な派生理論で説明する試みを提示した。

¹⁷ 所有属格が定表現であることは、there構文の意味上の主語になれないという定性効果(definiteness effects)からわかるが、there構文の意味上の主語として生起する時間名詞属格の事例もCOCAとGoogle Scholarにほとんどない。したがって、時間名詞属格も定表現であると考えられる。

参考文献

Abney, Steven P. (1987) *The English Noun Phrase in its Sentential Aspect*, Ph.D. dissertation, MIT.

Aboh, Enoch O., Norbert Corver, Marina Dyakonova, and Marjo van Koppen (2010) "DP-internal Information Structure: Some Introductory Remarks," *Lingua* 120, 782-801.

Amano, Masachiyo (2003) "On the Textual Function of the Possessor in English Genitive Expressions," *SITES* 1, 185-200.

天野政千代(2006)「's属格と名詞主要部との構造的関係」*JELS* 23, 1-10.

有村兼彬・北峯裕士・小林敏彦・福田稔・古川武史(2009)『英語学へのファーストステップ(改訂版)』英宝社,東京.

Chomsky, Noam (1986) *Barriers*, Cambridge, MIT Press, Cambridge, MA.

Declerck, Renaat (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*, Kaitakusha, Tokyo.

- Fukuda, Minoru (1993) "Head government and Case Marker Drop in Japanese," *Linguistic Inquiry* 24, 168-172.
- 福田稔 (2011) 「DP内部の属格主語の統語位置について」ハンドアウト, 第27回甲南英文学会・ワークショップ「主語をめぐって」, 甲南大学, 神戸市.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press, Cambridge, the UK.
- 加藤克美 (1999) 「情報構造から見た属格の用法」『英語語法文法研究』6, 99-113.
- Kuno, Susumu (1987) *Functional Syntax: Anaphora, Discourse, and Empathy*, University of Chicago Press, Chicago.
- Lambrecht, Knud (1994) *Information Structure and Sentence Form: Topic, Focus, and the Mental Representation of Discourse Referents*. Cambridge University Press, Cambridge, the UK.
- Lasnik, Howard (1989) *Essays on Anaphora*, Kluwer, Dordrecht.
- Quirk, Randolph, Sydney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvic (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman (Pearson Education Limited), London.
- Rizzi, Luigi (1997) "The Fine Structure of the Left Periphery," *Elements of Grammar: A Handbook of Generative Syntax*, ed. by Liliane Haegeman, Kluwer, Dordrecht.
- Roeper, Thomas (1983) "Implicit Argument and Lexicon," ms., University of Massachusetts, Amherst.
- Stroik, Thomas (2009) *Locality in Minimalist Syntax*, MIT Press, Cambridge, MA.
- 高橋順一 (1998) 「英語所有属格の意味について：認知文法的アプローチ」『旭川工業高等専門学校研究報文』35, 107-127.
- Takano, Yuji (1990) "DP-Internal Subjects," *English Linguistics* 7, 105-128.
- Taylor, John R. (1996) *Possessives in English: An Exploration in Cognitive Grammar*, Clarendon Press, Oxford.